

スタンランの文字のない物語

『ジャーナル・ル・シャノワール』における役割とその広がり

中村 大地

本発表では、テオフィル＝アレクサンドル・スタンランの「言葉のない絵 (Dessins sans paroles)」、すなわちサイレント漫画に注目し、それが掲載されたキャバレー・シャノワールの機関紙『ジャーナル・ル・シャノワール』における役割と、その文化的背景について考察する。

スタンランのサイレント漫画は、セリフや説明文を伴わず、連続した場面によって物語を表現する形式を特徴とする。1880年代のフランスの雑誌において、漫画やカリカチュアには通常、絵の下に説明文や会話文が付されることが一般的であり、完全に文字を排した物語形式は決して主流ではなかった。そのような状況の中で、スタンランは『ジャーナル・ル・シャノワール』において多数のサイレント漫画を発表し、猫を主人公としたユーモラスな物語を描いた。

このサイレント漫画の形式は、スタンランが独自に考案したものではなく、キャバレー・シャノワールの画家であったアドルフ・ウィレットが1882年から同誌に連載したピエロ漫画にその原型を見ることができる。ウィレットの作品は、1ページを複数の場面に分割し、左から右へと連続する構図によって物語を展開するものであり、この形式はその後スタンランやアンリ・リヴィエール、カラン・ダッシュュらにも共有され、『ジャーナル・ル・シャノワール』における漫画表現の一つの標準形式となった。

また、このようなサイレント漫画が受容された背景には、当時のフランスの舞台芸術との関係も考えられる。19世紀のパリでは、セリフを用いないパントマイムやアクロバットを中心とした舞台芸術が広く親しまれており、とりわけピエロを中心としたスラップスティック・コメディは大衆的人気を得ていた。ウィレットのピエロ漫画やスタンランの猫の漫画に見られる逃亡や追跡といった構造は、このような舞台芸術の身体表現と共通する要素を持っており、サイレント漫画はパントマイムの表現を紙面に移し替えた視覚的物語と見ることができる。

さらに、『ジャーナル・ル・シャノワール』におけるサイレント漫画は、単なる娯楽としてだけでなく、キャバレー文化の中で多様な形で展開した可能性がある。新聞に掲載された漫画が文学会で語られる物語の題材となり、さらに影絵劇へと発展していったことを考えると、サイレント漫画はシャノワールにおける芸術活動を媒介する重要な要素であったといえる。

本発表では、スタンランの作品を中心に、ウィレットやカラン・ダッシュュら同時代の画家の作品にも触れながら、19世紀末のパリにおけるサイレント漫画の成立とその受容のあり方を明らかにすることを試みる。これにより、スタンランの「言葉のない絵」を、単なる漫画作品としてではなく、キャバレー文化、舞台芸術、雑誌文化が交差する場において成立した視覚的物語として位置づけることを目的とする。